

講座の概要

- 1 大学連携講座の名称：第 1 回 地震学から見る静岡を知り、南海トラフ地震に備えて何が出来るかを考える
- 2 主担当大学及び所属：静岡県立大学・グローバル地域センター
- 3 連携先大学及び所属：東海大学海洋研究所
- 4 開催日時：2019 年 1 月 26 日（土） 14 時 00 分～16 時 30 分
- 5 開催場所：静岡市（静岡県男女共同参画センター「あざれあ」大会議室）
- 6 参加者数：100 人（一般 95 人、大学生 5 人）
- 7 事業の概要と成果（講師、要旨を含む）：

第 1 回の講座は静岡市で開催し、静岡県の地震や火山について総論を講義した。2 講義で構成された本講座は、はじめに、静岡県公立大学法人理事長、元京都大学総長の尾池和夫先生による「2038 年南海トラフの巨大地震」と題した講義が実施された。1707 年の宝永地震、1854 年の安政東海地震、1944 年の東南海地震などを例に挙げ「100 年に 1 回、南海トラフ地震が起きている。次は 2040 年ぐらいに起きる可能性がある」と指摘した。

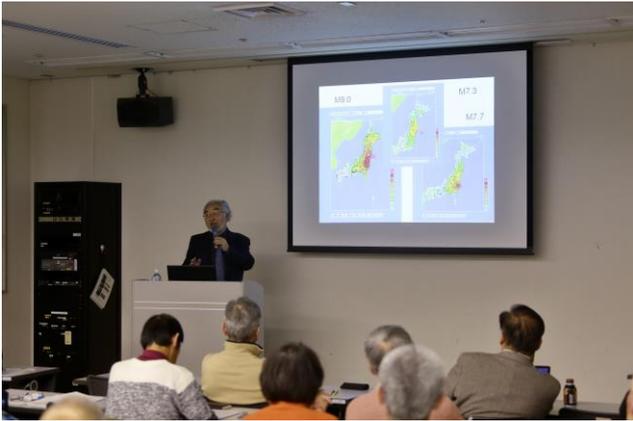
次に、東海大学教授・海洋研究所長・教授の長尾年恭先生による「地震予知研究の最前線一だれも知らない地震予知研究の実情とその実力者」と題した講義が実施された。日本地震予知学会会長と務め、南海トラフ沿いの大規模地震の予測可能性に関する調査部会メンバーなどを歴任した経験をもとに、現在の国の地震防災の動向や、地震予知研究の最前線について解説をした。

受託者（楠城）は、本講座を中心となって企画し、当日は本講義の運営や調整を行うだけではなく、開催挨拶と質疑応答の司会を担当した。受託者（楠城）と共に企画・運営した静岡県立大学防災ボランティアクラブ防' z は、当日、受付および司会を行った。また、防災ボランティア活動の一環を紹介するブースを作り、聴講者に活動の紹介をして大いに会場を盛り上げた。共催の静岡新聞社・静岡放送は、同社の新聞紙面で取り上げた防災関係の記事を展示して、聴講者に対する防災啓発の支援をした。

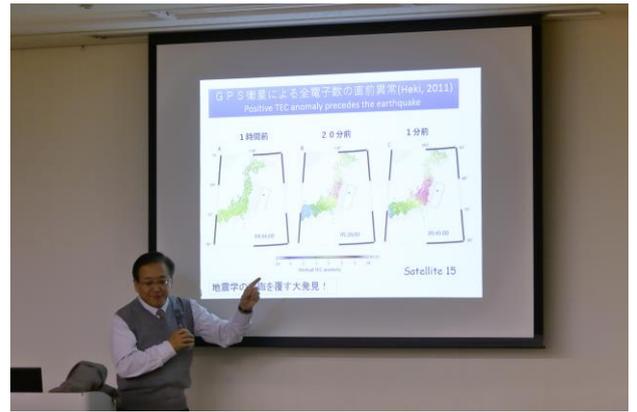
主催のふじのくに地域・大学コンソーシアムの協力で 2018 年 12 月号の県民だよりに本講座の告知をしていただいたこともあり、当日は 100 名の聴講者があった。質疑応答では、聴衆者から質問に対して講師が回答しながら進められた。また、アンケート結果には、「防災啓発のセミナーを企画してほしい」や、「報道などで地震予知について後ろ向きな印象だったが、講義でレベルが上がっていることが聞いて心強い」などの回答があった。

静岡市民に対して、学術成果を分かりやすく還元するという本講座の目的を達成しつつ、防災啓発に一定程度の効果があったので、非常に盛会であったと考えている。なお、本講座に関する記事が静岡新聞に掲載されている（2019 年 1 月 17 日、27 日）。

<当日写真>



(尾池先生)



(長尾先生)



講座の概要

- 1 大学連携講座の名称：第 2 回 富士山の内部から山頂までを対象とした研究と防災対応の最新動向を学ぶ
- 2 主担当大学及び所属：静岡県立大学・グローバル地域センター
- 3 連携先大学及び所属：東海大学海洋研究所
- 4 開催日時：①2018年11月21日(水)19時00分～21時00分
②2019年2月14日(木)19時00分～21時00分
- 5 開催場所：裾野市(①②共に、裾野市民文化センター多目的ホール)
- 6 参加者数：①230人(一般230人、大学生0人)
②120人(一般120人、大学生0人)
- 7 事業の概要と成果(講師、要旨を含む)：

第2回の講座は、裾野市を会場とし、日にちを分けて2講義を開催した。これは、共催の裾野市と講義を担当した講師との調整による。本講座では、富士山の内部から山頂までを対象とした研究と防災対応の最新動向を学んだ。

①では、2018年11月21日に、東京学芸大学准教授・東海大学海洋研究所客員准教授の鴨川仁先生による「富士山から生み出す新しい科学と防災」と題して講義が実施された。「孤立峰で山頂が雷雲の雲底に届く富士山は雷研究の適地」と説明し、静電気の計測やライブカメラを通じて雷雲の性質を見極める手法を解説した。

②では、2019年2月14日に、富士山科学研究所主任研究員の吉本充宏先生による「富士山の火山噴火とその災害」と題して講義が実施された。富士山の構造や活動史といった基本から学び、富士山における火山防災の問題点や火山災害の特異性といった裾野市民の生活に関係する事まで講義が及んだ。

講演後に富士山で発生する雷に対する防災などの質問があった。また、アンケート結果には、「富士山火山活動が身近に感じられた。今まで火山活動あるといってもピンとこなかったが、今回の講義を聞いて興味を持つことができた。」などの回答もあった。

2講義ともに企画し、当日の運営や調整を行った受託者(楠城)と共催の裾野市は、協力しながら「裾野市の防災の集い」の一部として開催できたことから、裾野市の自主防災関係者への告知が行き届いた。その結果、当日の聴講者は①230名、②120名であった。

裾野市民に対して、学術成果を分かりやすく還元するという本講座の目的を達成しつつ、防災啓発に一定程度の効果があったので、非常に盛会であったと考えている。なお、本講座に関する記事が静岡新聞に掲載されている(2018年11月21日、2019年2月9日)。

<当日写真>

①2018年11月21日(水)



(鴨川先生)



②2019年2月14日(木)



(吉本先生)



- 1 大学連携講座の名称：第 3 回 伊豆半島の自然と地震・火山を学び、その災害を防ぐ対応を改めて考える
- 2 主担当大学及び所属：静岡県立大学・グローバル地域センター
- 3 連携先大学及び所属：東海大学海洋研究所、静岡大学防災総合センター
- 4 開催日時：2019 年 2 月 2 日(土)13 時 00 分～17 時 00 分
- 5 開催場所：下田市(静岡県下田総合庁舎第 3 会議室)
- 6 参加者数：80 人 (一般 76 人、大学生 4 人)
- 7 事業の概要と成果 (講師、要旨を含む)：

第 3 回の講座は、下田市を会場とし、伊豆半島の自然と地震・火山を学び、その災害を防ぐ対応を改めて考えることを目的として、4 つの講義を実施した。

はじめに、受託者(楠城)による「地震の基礎を学び防災を考える」と題した講義を実施した。次に、東海大学海洋研究所地震予知・火山津波研究部門特任准教授の織原義明先生による「不確実な地震予測情報を防災に活かすことはできるか」と題した講義を実施した。3 つめの「3.11 語りつごう 大震災の記録を」と題した講義は、山田伝津館語り部・岩手県宮古市上村町自主防災会会長の菅野和夫氏による。最後は、「伊豆の大地の物語 ジオパークと防災」と題して、静岡大学防災総合センター副センター長・同大学地域創造学環教授の小山真人先生による講義が実施された。

本講座を中心となって企画し、当日は本講義の運営や調整を行った受託者(楠城)は、講義に加えて、趣旨説明と質疑応答の司会を担当した。受託者(楠城)と共に企画・運営した静岡県立大学防災ボランティアクラブ防' z は、当日の運営と司会を行った。また、防災ボランティア活動の一環を紹介するブースを作り、聴講者に活動の紹介をして大いに会場を盛り上げた。共催の静岡新聞社・静岡放送は、同社の新聞紙面で取り上げた防災関係の記事を展示して、聴講者に対する防災啓発の支援をした。

共催の下田市から協力を得て、下田市の自主防災関係者への周知が行き届いたこともあり、当日は 80 名の聴講者があった。質疑応答では、聴衆者からの質問に対して講師が回答しつつ進められた。例えば、ジオパークの実践面について、講師と聴講者との意見交換がなされた。また、アンケート結果には、「火山、地震の説明で、ジオパークの事を何回も貴重な場所である事を聞きましたが、観光の材料として一杯アピールして欲しい」や、「複数の講師の話が聞くことができる機会はとてもよかった。」などの回答があった。

下田市民に対して、学術成果を分かりやすく還元するという本講座の目的を達成しつつ、防災啓発に一定程度の効果があったので、非常に盛会であった。なお、本講座に関する記事が静岡新聞と伊豆新聞に掲載されている(共に、2019 年 2 月 3 日)。

<当日写真>



(楠城先生)



(織原先生)



(菅野氏)



(小山先生)

